

---

# 死なない少年と死んだ国

相模御鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死なない少年と死んだ国

### 【Nコード】

N7456Z

### 【作者名】

相模御鏡

### 【あらすじ】

1100年の歴史を誇り600万の信徒を擁する「人間」の組織、光言宗。数多くの不死者と人道を外れた呪術師で構成された「人外」の一団、大群。その二つの衝突が近づく中、死んでも死んでも死に切れない少年、球磨川禊はたった一つのスキルを駆使して、己の欲望を果たすために暗躍を始める。屍姫とめだかボックスのクロス作品です。屍姫とめだかボックスが同じ世界線にあるという設定ですが、舞台はほとんど屍姫のものになります。オリジナル要素は少なめにするつもりです。

## 序

「ねエ……煙製と焼き肉なら、どっちが好き？」

振袖のように垂れた袖口から、十指に銀の指輪を嵌めた手が伸び、爆発を伴い炎を放った。遠く離れて見ているだけでも、チャイナ服の少女、リオン・リンがたった一人で他二人を圧倒しているのが分かる。

服についた木の葉を払いながら、学生服の少年、球磨川くまがわ襷みそぎは楽しそうに笑っていた。リオンは、上半身こそ首と手首から先しか見えないが、下はうまく覗けば中身が見えそうな程短い。絶対領域を形成する黒のストッキングも、彼の劣情をそそった。

そして敵対している様子の 否、敵対できていたかは怪しいが、少なくとも相対はしていた二人組の、年上に見える女性の方も随分とまた際どい格好をしていた。法衣を思わせる羽織の下は、ビキニのような下着とショートパンツのみ。健全な男子高校生である襷が主に興味を持っていたのは、言うまでもなくこの二人だった。

しかし、おまけにと言えはいいのか、リオンが放った炎熱のお陰で、ノースリーブのセーラーを着ているもう一人の少女の長かったスカートまでもが焼けて短くなってしまうていた。

三人の女子の中へ今すぐにも宝の山だと叫びながら飛び出した襷だったが、彼が抱えている物を見られればおそらく、そこで戦っている三人ともを敵に回してしまうだろう。生まれながらの過負じやく荷かであり生きる過負じやく荷かでもある襷にとって、それは何としても避けるべき事態だった。

『それでも、まあ』 『過負荷マイナスである僕にあるまじき好機プラスだけど、これもさらなる墮落マイナスへのお導きだと思つて』 『ありがたく享受させて頂こうかな』

楔はへらへらと笑いながら、たった一人の少女が二人の女子を蹂躪する様を遠巻きに眺めていた。

## 1 毒牙

楔はできるだけ音を立てないように気を配りながら、猛火の拡がりに合わせて後退する。

彼の言うプラスには二つの意味があった。一つは見目麗しい女性一人と可愛らしい少女二人を好きだけ眺められるということ。そしてもう一つは、数での有利に任せて勝利を収めるかと思っていた二人組が、森を焼きながら戦っている一人に押されていることだ。

隙の突き合いで勝たせるつもりはなかったが、一度に相対する数は少しでも少ない方がいい。一対一で、彼が抱えている『それ』とさらに風に乗って聞こえたりオンの長所じやくてんを利用すれば、引き分けに持ち込むことは容易いだろう。彼は勝利に嫌われていても、敗北に病み憑かれていても、引き分けまでなら手にできるのだから。

グラマーな女性が、もう一人の少女を庇った。庇われたとはいえ、せいぜい人間一人分の面積しかない壁だ。はみ出た金髪の先が炎に触れ、黒い粉に変わる。

段取りを脳内で再確認する内に、戦いは終わっていた。チャイナ服の少女は不満気に髪をいじりながら、倒れ伏す二人との距離を詰める。

セーラーの少女、異常な身体能力を誇り前衛で戦っていた方の少女は既に身体の修復が始まっているようだが、その少女を最後の一撃から庇った茶髪の女性は全身が真っ黒焦げになる程の火傷を負っていた。その武器である五本の長い長い爪も、すっかり破壊されてしまっている。

この女性の身体は余すところなく人間のものだ。この傷ではもう助からない。リオンはそう判断して、女性を放ったまま少女の方へと近付き、腹を踏みつけ、手を翳かきした。再び彼女の手に嵌った指輪から、炎がちらつく。しかしその炎は酸素を喰らって肥大化することとはできず、そのまま立ち消えることになる。

空虚を帯びた言葉がリオンを打ったからだ。

『あーあー』 『まったく、もう』 『酷いことするなあ』 『まあ戻す  
からいいけど』

「な……ッ!？」

突然背後に現れた気配に驚き、リオンが振り向く。リオンと同じ  
黒髪で、彼女の知識の中では学ランと呼称される服を着た少年が、  
長い爪を使っていた女性、あらがみりか荒神莉花の身体に触れている。触れられ  
た莉花の身体は、彼女が彼女であると認識できる程に回復していた。  
火傷の痕が消えている。どころか、焼けた筈の服までもが再生し  
よってつけられた傷は巻き戻るように修復されていく。

「お前……何をしてる！ お前は何者だ！ 何処から来た！ 如何  
してここにいる！」

怒りで動揺を包み隠し、怒号を浴びせる。目の前で女性に触れて  
いる少年は、焦りを隠し切れないリオンとは対照的に漫然と立ち上  
がる。そのゆらゆらした動作が、リオンに不快な印象を与えた。し  
かしその印象を噛み砕く暇もなく、さらなる驚きがリオンを襲う。

螺子が、通常より遙かに巨大な、小太刀くらいの大きさの螺子が、  
彼の両手に握られていた。

それも土の中にある鉄を集めて構成したとかそういう類の、理屈  
でこじつけられそうな現れ方ではなく、本当に忽然と出現したのだ。  
空間を掻き分けて、突如。空間を擦じ曲げて異空間から取り出した  
かのように。

幻覚系の能力を疑ってみようにも、これだけはつきりと禍々しく  
質量を持たれては疑いようがなかった。仮に幻覚だったとしても、  
この螺子は現実にさえ干渉してしまうのではないか。そんな疑念も  
鎌首をもたげ、次から次へと心という増埒で疑惑の渦を成す。

張り付いた笑みが、おどろおどろしい螺子をリオンに向けて構え  
る。

何が起こっているのか、おおせいのけがれ大群の、言わば理解を超えた理外の集団

の教主を務めるリオン・リンにすら理解できなかった。彼女は彼女で、それなりに理を外れている自負があつたが、しかしこれは例外が過ぎる。

彼、球磨川楔の使っている『オルフイクション大嘘憑き』という過負荷自体が本来、人智理解の範疇から排斥され物理法則の制約を無視した代物なのだが、教主である以前にきよつしせん僵屍仙であるリオンにとって、その理解できない力こそが、その世界に拠らない力だけが、自身の存在を脅かす力だつた。

だから警戒した。彼女の全神経で楔を捉える。僅かでも楔が動けば楔を正面に据えて構え、荒神莉花とあませさき天瀬早季との戦いで崩れかけた焼死の指輪を含め、他の十の死の指輪を、余力を残しつつ解放する。

（余計な能力を使わせる前に 殺す！ 殺し尽くす！！）

結果を先に言つてしまえば、楔はリオンの隙を突いた。リオンの集中力と警戒心の間を縫つて、だ。

隙を突かれる直前まで、リオンの瞳は死んでいなかった。いかに目の前の人間、あるいは屍が強かろうとも、自棄やけになりかかつても尚。もちろん、自分の十の死の鉄壁は決して崩されることはないという自信もあつたのだろう。

さらに言えば、どれだけの能力を持つていようが、楔の武器が螺子であつたこと、彼女にとつて見慣れたものをただ巨大化させただけのものであつたこと、それが彼女の心に生まれた隙を加速させた。そして。

『質問が多いなあ』『リオンちゃんは』

球磨川楔という少年は、ありとあらゆる弱点を知り尽くしている。リオンの自信が生んだ油断じやくたんを、そんな彼が見逃す筈はなかった。

彼の過負荷マイナスは、彼女の呪いプラスの下を、悠然と掻い潜つた。

それは、ハードルは高ければ高い程潜り易い、という言葉の体現のようだつた。

「な、あ、え……？ 嘘………」 焼死、凍死、感電死、撲死、斬

死、餓死、病死、毒死、溺死（窒息死）、圧死という十の死を各々が司っていた銀の指輪は、一瞬にして易々と貫かれている。

それでいて、リオンの手には傷一つない。背後に転がる十の螺子が、確かに彼女の十死の指輪を砕き、彼女の十指を貫いた筈なのだ。『まず一つ目の質問だけどー、僕はただ単に僕のスキルを行使したただだよ』『「大嘘憑き」っていうんだけどね』

楔は肩を竦めて掌を広げ、にこにこしたまま語り始めた。

無論、リオンにその話を聞く余裕はない。自分の無敵を保証した指輪が破壊されてしまったのだ。何より彼は、何もない空間から螺子を出現させる能力があるようだった。そしてそれは幻覚ではなく、少なくとも彼女の十の死の指輪に干渉できる程の質量を持った存在であることが、ここで証明されてしまった。まさか、またさっきと同じように、同じことができるのではないか？ もしできるならどうなるか。

今、彼女の十指に、指輪は、ない。

そこまで考えてから、リオンははっとしたように楔を見た。へらへらと笑うその顔が、どこまでも傍若無人に映った。が。

『そして第二』『僕は球磨川楔』『健全で負完全な過負荷マイナスの極値を名乗らせてもらってる、一介の男子高校生さ』

彼の身体は細身で、服の上からでも脆弱さが見てとれる。こんな脆弱にすら、隙を突かれれば、自分は、こんなにも、脆い。そして弱い。どちらが脆弱だ。誰が無敵だ。『誰の敵として扱おうにも不足する』という意味では、この男だって無敵ではないか。

（私は　どっちだ？）

虚勢の怒りを込めて楔を睨みつけてみても、向かう所敵無し of 少年はびくりともしない。

『三の巻は簡単明瞭、この近所の住宅街に僕の家がひっそり佇んでいたというだけだよ』『物珍しさでこんな所へ立ち入れてしまうくらい近くにね』『さて、残る最後の一つへの回答だけど』

楔がリオンの双眸を見つめて、一つ呼吸をした。



(来る　　！！)

『それは』

すつ、と。

『ここに倒れている彼女と、僕との距離を「なかったこと」にしたからだ。』

十メートルは離れていた距離を、一步も動いたように見えないまま楔が詰めて見せた。

否、それよりも

「ひ、い!？」

『こんな風にぐふう!？』恐怖のあまり、リオンが楔の腹を蹴り飛ばす。ただそれだけで、柔な鍛え方すらしていない彼の身体は倒れた莉花の上を越え、焼け焦げた木へと衝突する。背中からごきりと嫌な音がして、ぐたりとした身体がそのまま地に落ちた。

しかしリオンの表情は硬直したままだ。

たった一瞬。ただの一瞬の出来事だった。

ただ唐突に距離を詰めただけの楔の表情が、それを間近で見たりオンの脳裏へと刷り込まれた。

日本に来る前も、日本に来てからも、様々な人間を殺したし、色々な屍を狩った。蜃や仙狸の幻術には心底驚いたし、火鳥や火鼠には可愛いという思いを浮かばせてもみた。のつぺらぼうや海坊主にはその木偶の坊振りに呆れ、製作者を殺した現場に居合わせたことのある麒麟や牛魔王に関しては、斃した後でその不格好さに腹を抱えて転げてしまった経験もある。

しかしこれは、そのどれとも違う。

生きている人間の身体に、屍の未練と妄執を放り込んでしまったような、矛盾を孕んだ悍ましさがあった。

そして自分が蹴り飛ばした男は、たった今致命的な音を鳴らした筈の背中をさすりながら、立ち上がった。

「あ……………い、嫌! どうしてよっ! 何で、今、だってお前は、お前の背中はツー!」



目から流れ切れない涙が鼻へと逃げていき、鼻水のように彼女の唇に垂れる。くしゃくしゃの泣き顔を前にしても、楔はまだ、足を止めない。

『大丈夫だよりオンちゃん』 『きみの涙も嗚咽も弱音も』 『僕がぜんぶぶなかつたことにしてあげるから!』

彼の湛える不鮮明な笑みが濁った視界を通じてリオンに届く。彼の放った不気味な言葉が鼓膜を通じてリオンに届く。最早、楔が笑っているのかなど関係なかった。楔が何と言っているのかも気にしていられなかった。リオンは只々謝り続ける。

しかし楔は、リオンの目の前に立つと、すつと手を差し出した。右手を、握手を求めるように、彼女の眼前へ。

「お、おねが、い……」

眼球でも潰されるかと思っていたのだろう、彼女が一度閉じた目を開くまでに数秒を要したが、彼はその間もずっと状況に不似合いな笑みを消すことなく、気味悪い気配を振り撒き続ける。

『そこまで言うなら、そうだなあ』 『うーんと、そうだ!』 『僕と正々堂々対等な立場で、公明正大に取引でもするとしようか』

楔は言い放った。一切の代償を求めず自己の権利すら投げ打った少女に対して、彼は改めて取引という名の命令を持ちかけた。

従わなければ殺される。そんな前提で取引も何もあったものではないが、彼はあえて取引という言葉を用いた。

『こちらからは三つ』 『きみの命を助けること』 『僕がついこの間、きみ達から拝借した屍法姫經典しほつぽけいけんとかいう書物の引渡し』 『そして僕の「大嘘憑き」による、きみの十の死の指輪の回歸』 『破格の条件だと思っぜ』 『さらに、きみからの条件は、そうだなあ』 『可愛い女の子への骨折り大サービスということ』 『たった一つで構わないよ』

希代の最弱、球磨川楔は、光言宗ひかりのむねと大群おほぐんという二つの巨大に対し、一つ目の毒牙を、小さくも確実に突き立てる。

『僕の屍姫になって欲しいんだ』

## 2 大嘘憑き

人の死と共に生まれる、人間の生への未練。その未練によって活動する動く死体リビング・デッドを、屍と呼ぶ。そしてその屍の内、屍法しほう姫きぎ経きょう典てんに記された技法で光言宗の僧侶と契約を交わし、屍を殺すために戦う少女を屍姫と呼ぶ。さらに、屍姫は契約相手に関するいくつかの制約を受ける。

その他、屍についての一通りと、屍姫についての一通り。

楔が知っている屍についての知識は、こんなものだった。あとは先程の『実戦』を見て、屍でなくとも扱える特殊技法と屍が特有する特殊能力があるらしいことを知ったくらいだ。

これだけ知っていれば充分なのかもしれないが、この必要最低限を除いて、他には何も無い。球磨川楔という少年が面白半分なのか本気なのか巫山ふしやま戯ごているのかは分からないが、そんな知識量でこの世界へ飛び込んできたことだけはどうしても気に食わなかった。

「……………ありがとう」

そんな気に食わない楔の手を、握るしかなかった自分にもまた、嫌気が差す。にも関わらず、彼女は楔に礼を言った。あくまで社交辞令の域を出ないものだったが。

『礼には及ばないさ』『その代わり、きみと僕、そしてこれから引き抜いてくるつもりの奴ら』『つまり僕達の名乗る組織名は僕に決めさせてもらうぜ』

嫌な予感しかしない言葉を遮る暇も与えず、楔は堂々を胸を張って宣言する。

『その名も「裸エプロン同盟」！！』

「はあっ!？」

契約を終えた楔の言葉に、悍ましさや恐ろしさは含まれていない。何もなかった。彼の言葉は誰の心も揺らせないし、だからこそ彼の心は誰にも揺られないのだろう。それ故に、リオンも普段通りの姿

で襖に接することができる。

「ちよつと、もうちよつとマシな名前に……」 『盟主はもちろん僕！』 『目的はまだ明かせないけど』 『いざ！ 二人で一緒に未来を築こう！』

普段通りの姿で接することができるのだが、自分の言葉を気にも留めずに嬉々として裸エプロン同盟といういかかわしい名前の組織について語る姿に呆れ、ほんの少し襖から距離を取る。

彼がそうしたのと同じように、彼女も襖の言葉を無視し、自分の手を握ったり開いたりして、自分が終わっていないことを実感する。唐突にリオンの肩に襖の手が乗った。再び彼女の手に戻った十死の指輪を使えば、こんな至近距離でなら彼を殺すことも可能だった。だが、既に彼女は球磨川襖という契約者を得てしまっている。

彼が死んだだけで、リオンまでも死に至る。契約者から離れると回復能力が落ちるといふ欠点<sup>マイナス</sup>だけは彼女の呪い<sup>プラス</sup>によつて相殺できるが、襖の死だけはどうにもならないだろう。それに類する話で、リオンは普段の彼の余りの弱々しさを気にしていた。

「……死なないですよ」

その辺でたむろしている不良の一人にすら死敗<sup>しはい</sup>を喫しそうな薄弱ぶりを全く包み隠そうともしない少年を見て、リオンが呟く。それに対して襖は、満面の笑顔でこう答えた。

『うわあー！ こんな可愛い子にこんなお願いされちゃうなんて！』  
『こりや迂闊に死ねないね！』

親指を立てた拳をリオンに向ける。苛立ちに任せて襖を蹴り飛ばしそうになったが、今度も彼の上下半身がきつちり繋がったままで吹き飛ばとも限らないので、ギリギリのところまで踏み止まった。

と、

「お前らは何時<sup>いつ</sup>まで茶番劇を続けてるんだ？」

黒い礼服と黒死の匂いを身に纏い、ヴードゥー<sup>ボコール</sup>の邪術師、『人形使い』ロギア・C・ギュスターヴが現れた。

リオンが目を見開く。ロギアに背を向けている形になっている襖

も、初対面の時と同じように緩慢な動作で振り向こうとする。

その首を、イエンという名を与えられたロギアのお気にきまに入りが押し折った。リオンの蹴りで背中を木にぶつけた時よりずっと酷い音がして、楔は成されるがままに崩れ落ちる。同時に、リオンの身体も力なくへたり込んだ。

「あ……………？」

ぐたりと横たわる楔を見る。歩くまでもなく近い距離なのに、永劫触れられないような久遠に感じる。二人の間に繋がっていた『縁』が失せてしまったのだ。地獄を眼前にして垂らされた蜘蛛の糸は、リオンが掴んだ瞬間に、垂らした者の意志も掴んだ者の意志も関係なく事切れた。

「？ おい、何やってんだよ、行くぞ……………」

ロギアが待つ。しかしリオンは立てない。当然だ。彼女は今、契約者を失った屍姫という、どうしようもなく脆弱な立場にしかないのだから。

「……………おい、イエン！ そいつを立てさせてやれ。なんかよく分かんねーけど腰でも抜けたみたいだ」

待ちかねたロギアが不審な表情でリオンを見遣る。大群おおぜいのけがれの擁するもう一人の人間、鹿堂赤紗ししとうあかしゃならば一人が契約した所を見て、警戒心と敵愾心を双方へ向けることもできたのだろうが、こちらの男は光言宗にはほとんど無関係だ。

その鹿堂赤紗でも、楔が生き返り、立ち上がり、牙を剥くなどは到底思えなかっただろうが。

「……………」

リオンにとつても意外なことだった。自分の死まで『なかったこと』にできるとは、彼女も思っではいなかった。

突然湧き上がった言い知れぬ恐怖に、ロギアの心が戦慄する。少年を模して作った人形イエンの身体が、ロギアの思考と連動するかのよう動きを止めた。

『誰だよお前』 『男女が二人つきりでいい雰囲気になってるってい

うのに、何の考えもなく邪魔をしにきたのかい？』「だとしたらきみは、僕のこの手で不幸を味わわされるべき逸材だぜ」『だから』

その不気味さが襖から放たれたものだと知るやいなや、即断、冷や汗と共にロギアが後ずさる。黒のシルクハットが頭を離れて地に落ちたが、ロギアにそれを気にしている余裕はなかった。そしてリオンは、そんな襖の背をただ見つめることしかできなかった。

「おい、リオン！ 斬死でも撲死でも何でもいい！ とつとと十の死でそいつをぶち殺せ！ こいつはヤバい！」

片眼鏡を貫き、ロギアの眼孔を螺子が抉る。その動きを、イエンとリオンは固まったまま眺めているだけだった。

こんな死に方は、まだマシな方だ。私は十の死で、数多の人間を殺してきたのだから。

こんな殺し方よりも、ずっと酷いやり方で。

「人の話は最後まで聞けよ、これだから週間少年ジャンプを読まない連中は。」

振り返る襖に襲い掛かろうとしたイエンを、リオンの圧死が叩き潰した。

上半身と下半身が見事に分かれて、これでは斬死と見分けがつかない。

「おっと、ありがとうリオンちゃん」『でもお連れの彼らも来ちゃったことだし』「仕方ないや、今日はこの辺でお別れするしかないかな」

襖は事も無げにリオンに手を振る。リオンと擦れ違う瞬間にも、友人に対して「また明日」とでも言っているような気軽さだった。契約を終えてすぐに嬉しそうな顔で裸エプロン同盟について語っていた時のように、今の彼には邪術師ロギアを怯えさせた不気味さも、教主リオンの心を折った悍ましきもない。

『続きはまた今度』『ね』

リオンの視線の先では、確かに頭蓋へ突き刺さった筈の螺子が、



倒れたロギアの頭のすぐ脇で、地面に突き立っていた。

「何よ、これ……」

振り向いた楔は、擦れ違ったばかりのリオンの頭を撫でて言う。

「あれ、確か言っただけだっけ？」 『僕の過負荷スキル、オルフィクション「大嘘憑き」だよ』

平然と。

『現実を虚構すべてなかつたことにする』 『たとえば全身に負った火傷げんじつを』 『たとえば二人の距離げんじつを』 『たとえば礼服の彼が見た記憶げんじつを』 『あらゆる事実をあまねく真実を虚無の彼方へ帰してしまう』 『それが僕の「大嘘憑き」だ』

イエンの頭からぐしゃりと音がしたかと思うと、裁断された筈の胴体はきちんと繋がり、またしても顔のすぐ横に螺子が突き刺さっていた。

「そんなの、そんなの……ッ！！」 途方も無い能力を聞かされて、そして漏れそうになった声を抑える。

たとえば、『呪い』も？

それを聞いてしまえば、それに答えられてしまえば、本当に取り返しがつかなくなるような気がして、リオンは必死に言葉を封じ込めた。

リオンの不安を払おうとしてか、楔は屈託の無い（ように見える）笑顔で話しかける。

『だから安心してよ』 『きみがいくら「呪い」を使っても』 『僕の霊気ルンが減ったという現実をなかつたことにして、無尽蔵にスタミナを供給してあげられるからさ』

的外れな返答に、リオンは溜息をつく。しかし、期待に沿わない返答は、リオンの心を軽くもした。

「そう、なんだ。私の呪いは制限されることなく使える。そうなんだ」

話が逸れたことで、再び重圧に折れて曲がりそうだった心が、平静を取り戻す。一度折れ目のついてしまったものを元に戻すことは

できないが、彼女の心を押し折つたのは球磨川楔という男ただ一人だし、その男は既に、彼女の味方だった。

彼女が従属するという形ではあるが、彼は確かに彼女の味方に違いない。

(……筈、よね)

「楔、あなたは……私の味方なんだよね？」

疑念を拭うように問い掛ける。

「味方どころかこれから一生を共にするんだぜ！」 『最早、伴侶と言つて差し支えない程さ！！』

また嬉々とした表情で、楔が言う。本当にこの男は自分が僵屍きょうしせん仙という存在であることを分かっているのだろうか、笑いが漏れた。リオンの心は、それを折つて砕いた張本人によって、より強く繋ぎ直された。記憶をなかつたことにして何度やり直しても、ほぼ万全に近い状態のリオンを仲間に引き入れるという楔の算段は、こうして一度の失敗をも経験することなく成功した。

「そう。そうよね。あなたが私の味方。球磨川楔が、私の味方」

リオンが、死んだ わけではなく、気絶してしているだけの口ギアに近寄る。

『ん』『その通り』『僕がきみの味方で、きみが僕の味方だ』

証拠を残さないように自分の放った螺子を全て回収しつつ、楔はリオンに声をかける。

『それじゃあ僕はこの辺でお暇するよ』『それと』『いくら靈ルン気が無尽蔵だといつても、指輪の修復までは自由にできるわけじゃないんだから』『あんまり無理しちゃ駄目だぜー！』

お茶目な雰囲気のまま、球磨川楔は踵を返す。

歩き出した楔の姿が見えなくなるまで、リオンはその背中を目に焼き付けていた。

### 3 研修生

「高峰猊下」  
たかみねげいか

光言宗総本山の霊安室で、高峰と呼ばれた年配の僧は苦虫を噛み潰したような顔で報告を受けていた。ここには現在、四十一の棺が運び込まれている。扉が開き、最後の棺を抱えた二人組の僧が入ってきた。

高峰宗現。そつげん 光言宗開祖と共に死者の世界から現世を守り教えを広めた十人の高弟達の血族、『偉家十聖』いけじゅうせい 高峰家の出自で、現在は光言宗内の現場主義派閥『修法派』しゅうぼうは を支える僧正である。

六僧正としての職務の他、“最強”の屍姫として名高い轟旗神佳とどろきかみかの契約僧としても一線で活躍している。

「荒神権僧正しんせんの搜索は現地の者に任せるとして、研修生の方々は如何いたしましょう?」

「……研修生?」

高峰が険しい顔をした。どうやら報告に上がっている僧は一度告げていたようで、一瞬だけ戸惑った顔をしたが、すぐに手に持った紙へ視線を落とし、読み上げようとした。

高峰も少し疲れを感じながらではあるが、すまない、と断って報告に耳を傾けようとした。

その時。

「! 痛っ!」「……どうした?」

高峰を探してやってきた神佳が霊安室に入るか入らないかというところで、一人の僧が声を上げた。

四十二個目の棺を運んでいた男だ。神佳を除く全員がその男に注目し、神佳だけが、棺の中から這いずり出す何かを見た。

「っ!」

瞬間、他の全員の意識が空白する中、神佳は刀を握り、棺から飛び出した屍を斬り裂くために駆け出した。

血飛沫が舞う。

神佳の斬撃がすんでのところで止まり、振り抜きかけた剣筋の先には、グローブを嵌めた腕があった。

「おっと、悪い悪い。邪魔しちまったか？」

屍の頭を潰した色黒の男が笑いかける。確かに少年と言える程小さくはないのだが、彼らをここまで連れてきた神佳と、高峰にその情報を取り次ぐ筈だった僧だけはこの大男に見える少年が高校生であることを知っていた。

「いやーそれにしても、俺の反射神経についてくるとはやるじゃねえの。俺の方が一歩速かったみたいだけどな」

色黒の少年の後ろから、髪を後ろで縛った仏頂面の少年と、髑髏のネックレスを付けた『威風堂々』という言葉がひどく似合いそうな少年、それから、それぞれ仮面に防寒着、包帯とマントという風体で性別の分からない二人が遠慮する様子もなく入ってくる。屍とはいえ人間の姿をした存在の脳天を一撃で砕き割ったこの少年とい、刀を腰に提げた少年に、顔にナイフを突き刺した少年（？）、徹底した防寒振りで見ているこちらが暑くなる少年（？）と、指輪を嵌め両耳にピアスを付けた尊大の塊のような少年が可愛らしく見える程だ。

「個性的な面々だな。……研修生、というのは」

高峰の顔が曇るのを待っていたかのように、

「あー、こつちにもいまーす」頭上から声がした。

入ってきた五人以外が驚いて上を向く。

そこには、分厚い服を着た目付きの悪い子供と、その後ろ襟を掴んだまま天井を歩いているやたら露出度の高い少女の姿があった。そう、その少女はまさしく天井を歩いていると言って差し支えなかった。周囲の視線が釘付けになっている間にも、ブーツを履いたまま左足を一步、右足を一步、と交互に踏み出し、高峰の真上へと近付いてくる。

高峰が顰めた眉の間を指で叩く。神佳は神佳で平然と佇んではい

るが、僅かに殺気立っているようだ。

頭上を取られたのが気に障ったのだろうか。

「……………高峰様。研修生七名、到着なさいました」

神佳が不承不承といった感じで紹介すると、高峰の顔が一層険しくなった。

「研修だと。こんな時に？ 平常時ならともかく、まして今は大群との緊張状態が続いているんだぞ。大僧正様も何をお考えで………巫山戯るのも大概にしてくれよ………屍の対処だけでも頭が痛いというのに」

高峰のイメージしている『研修』とは、平凡な学生が平和な日本社会を学習するために見学しに来るというものだ。今この時に来られては、そんな平凡も平和も台無しになってしまう。高峰は小さく「こんな高校生達にトラウマを植え付けるといのか」とぼやいた。しかし高峰に対して、尊大な少年が返答する。

「肩書きに惑わされて力量を測り損なうとはな。まあ相手が見ただけで分かる程の格を見せつけられなんだ俺にも落ち度はあるが、しかし偉大なる俺を前にその不遜な物言いは頂けん。とりあえず、ひざ」絶対的な威圧感を纏った少年の言葉は、チリツ、という微かな音と同時に放たれかけた電流と共に鳴りを潜め、神佳の剣閃が少年の髪を僅かだけ短くした。

色黒の少年が零した速えな、という一言にも眉一つ動かさず、眼鏡の奥の伶俐な瞳が都城王土を見据える。

「……………見た所、ここにいる屍姫は貴女一人のようですが。僕達七人を相手取って勝算でもあるんですか？」

どこから取り出したのか、腰に提げた刀はそのまま、新たな二刀の切っ先を挑発的に向けているのは、仏頂面の宗像形という少年だ。包帯の少年（？）が距離を取ると、彼（？）との間に割り込むように天井に立っていた少女が降りてきた。掴まれていた子供も、着地してすぐに懐に手をつ込み、何やら仕掛けようとしている。

各々が思い思いに臨戦の構えを取る中、仮面の少年（？）行橋未

造ぞうが倒れた。

「ガスを散布しようとしていたようなので、眠らされる前に眠って頂きました」

神佳が説明する瞬間を隙と見做して斬りかかった宗像の剣撃は目もくれられることなくそのこころを受け止められ、宗像自身もそのまま力任せに弾き飛ばされる。自動操縦オートパイロットとまで称される自慢の反射神経を持つ男はグローブを使って丁寧ていねいに宗像を受け止める。間断なく露出狂ろしゅきやう紛いの格好をした古賀こがいたみが突進すると、神佳はそれを受けずに躲し、すれ違い様に脇わきから蹴りを入れた。高千穂たかちほ仕草しくさは反射神経だけでは受け切れない威力と判断し、いたみを躲して神佳に拳撃を繰り出す。感覚神経から直じかに運動神経へ、反射神経に任せた連続攻撃を、神佳はやはり柄と鎧よろいだけで受け切り　一瞬だけ高千穂へと向きを変え、その鳩尾とびすへと一撃を叩き込んだ。

高千穂の身体が宙を舞う。

その一瞬を突いて、王土が動く。逃すまいと反転した神佳の視界に、きらりと光るものが映った。

(注射器　?)

何が入っているのかも定かでないそれを躲そうとした神佳の身体が止まる。神佳の身体を捕らえたのは、包帯の少年(?)名瀬なせ天歌てんかの放った注射器とは別に、身動きの取りにくそうな服を着た雲仙冥利うんせんめいりの張り巡らせた見えない檻かじだった。

不格好なまでに分厚い彼の服　風紀委員会特服とつぶく『白虎』を縫製つくりしているのと同じ『アリアドネ』という糸を利用した『鋼糸玉』スチールワイヤー。

一本あたり五トンを支える科学技術を、雲仙冥利うんせんめいりの異常な器用さで使いこなして生まれる最高峰の檻、『霞網』。

神佳の周囲から、ぎしりと音がする。

「ケケケ！　そいつに捕まって動ける奴なんざいねえよ、ボケ！」

広い場所で支柱となる物が少なかったとはいえ、かなりの本数の糸が神佳の間合いを侵犯している筈だ。そして身体を捕らえられたことをはつきりと理解するまでの数瞬の間に、名瀬の放った注射器

が神佳に届く。

「ぐ、」

腹部と頸部に走る痛みを歪めて、しかし神佳は二人には目もくれず、その視線は、王土の唇を見据えていた。

「シザメクネ跪け。」

その言葉に、王土を含めた研修生七名と鋼の檻に閉じ込められていた神佳を除く、その場の全員が跪いた。王土に服従でも誓ったかのように。

「ほう？ それなりに本気でこては圧政をかけたつもりだったが、少し足りなかったか？」

「いえ、効きましたよ。恐ろしい程の圧力です」

神佳の周囲の空気が解放と緊迫で満たされる。科学力と異常度の織り成す極地とはいえ、所詮は糸の集合。対するは人ならざるモノを斬ることにかけては右に出る者のいない、”最強”の屍姫、轟旗神佳である。王土が言葉を放った一瞬は、彼女が束縛から解放されるには十二分だった。

刀を構えた一瞬の内に、再び王土がこては圧政を振るう。

「ヒレフセ平伏せ」

王土の言葉に神佳の身体が崩れかかり、神佳の刀が王土の皮膚をなぞった。髑髏のネックレスが床に落ちる。

「……ふはっ！ 素晴らしいな、屍姫。これほどの強さならば俺達が必要などなかったやもしれん」

危うく自分の首を切り落とされるところだったというのに、首元の血を拭きもせず王土は豪快に笑う。神佳は彼を無視して、はこやく革命したダメージによって血みどろになっている左足を引きずりつつも高峰の傍へ寄った。

「高峰様、大丈夫ですか？」

「ああ……心配には及ばん。しかし七人がかりとはいえ、お前が人間を傷つけざるを得んとはな」

高峰は立ち上がると、既に銘々自分の身だしなみを整えている六

人と、倒れている行橋を順繰りに眺めた。

「先程は申し訳なかった。確かに私は、あなた方の力量を見誤っていた。改めてお願いしよう。光言宗わたしたちに力を貸して欲しい」

他の返事を聞きもせず、やはり王土が笑う。

「ふつ、偉大なる俺が承知しよう。これより箱庭学園はこにわがくえんの『サーティン・パーティ』十三人』より選出された研修生七名おれたちが光言宗に力を貸すぞ」

王土の号令と共に（行橋だけは電撃により強制的に立たされて）研修生としてやって来た七人が並び立つ。

壮観と言うべきこの状況で、高峰が疑問を投げかけた。

「……………サーティン十三人？ 七人しかないようだが。他に六人いるのか？」

「ああ、そいつらは後から……………実際はともかく、予定としては来ることになってるぜ。何せ異常度アブノーマルが飛び抜け過ぎて十三組オレタチの中でも浮いちまう程の奴らだからな！ 本当に来るかどうかは運次第だろうな」

冥利がフォローを入れると、王土がそれを鼻で笑う。

「ふん、奴らは来ないだろうな。ま、しかし、不知火理事長は滅多矢鱈たじろに山磨市やまこへ生徒を送り込みたいようだが。要は俺が大群を蹴散らし教主を蹴散らし、そして傲岸不遜にも『王』を名乗っている死に損ないの屍シムネを斃たおせば良いのだろう？ 何、余計な奴らを待つ必要もなく、簡単なことだ」

王土が腕を組んで神佳に背を向ける。

「顔合わせはこのくらいで充分だろう。まあ、こちらの地理やらの勝手は知らんからな。俺達は光言宗ひくごんしゅうの都合に合わせて手駒として動いてやって構わんぞ。何なら今すぐにも根城へ突っ込みたいくらいだが、それも流石に貴様らの面目が立ちそうにないからな 準備が整うまでは待つておいてやるう」

王土が扉を出ると、それに続いて研修生全員が霊安室から立ち去った。

高峰と神佳を含め、他の僧達全員が、彼らが出ていくのを呆然と



眺めることしか出来なかった。あれより異常度の大きい人間が六人もいると聞いて、腰が抜けてしまった者もいるらしかった。

「高峰様……彼らは人間ですよ？ それも、この国の次代を担う高校生です。よろしいのですか？」

「構わん、としか言えんよ……歯痒いが、な。戦力は少しでも多い方が良い。としか言いようがない」

神佳はやはり不満そうだ。それ程に若者を戦略的に数えるのが心苦しいのだろう。

しかし、高峰の表情は、それよりもさらに昏くらかった。

汚物として地下に遠ざけられているが故に、地上に生きる人間にはほぼ感知することが出来ず、水場であるために死霊や怨念が集まりやすい。さらに、地面を深く穿った人工の穴の底にある『王』の顕現する陣へと繋がる移動経路としても優秀だった。同種の通路が無数に存在するため、陣の直近にあるものを除いてほとんど警備の必要がない。万一どれか一つが断たれたとしても、少し屍を差し向けてやればすぐに奪還できる。

現在、『王』の陣から直結する全て下水道が余すところなく大群おおぜいのけがれの支配下にある。

その内の一つから伸びた長い長い廊下状の通路の奥。七星の溜まり場となつているその場所を、鹿堂赤紗が訪れていた。

色無地の長着物と羽織を着ている。彼も構成員の一人とはいえ、一応人間だ。元々、彼の座壇ざだんの特性上近接戦闘に向く服装をする必要がないこともあるが、これは強力な屍と相対し、交渉までしようという格好ではなかった。

「よお」

和服の上に羽織を載せた男が出迎えの言葉を寄越す。傍らに一人、さらに後ろに三人。計五名の七星の意識が赤紗だけに向けられる。

「珍しいな、赤紗。ここに来るとは」

同じ男が赤紗の様子を探る。口周りの髭と顎から首にかけて刻まれた北斗七星が特徴的なこの男の名は、狭間ハサマという。七星の頭目・第一星であり、教主ではないが『王』復活の儀式の際には七星の頂点である北斗ほくとの代理を務められる程の力を持つ屍だ。

彼がにやにやと笑いながら赤紗に話しかける。声は穏便だが、人ならざる異形の威容は、訓練を積んだとはいえ人間の範疇に収まる赤紗の精神を圧迫する。

「依頼か？ 七星七等に」

それでも、その詰問と言って違くない威圧に、顔色一つ変えないままで赤紗は応えた。

「ええ。『死の国』建国への次の楔をお願いします」

赤紗の反応と言葉に、少年の姿をした歪質と可愛らしい外見の重無は驚いたような顔を作る。老翁の屍、  
< / r b > < r p > ( < / r p > < r t > サカ < / r t > < r p > ) < / r p > < / r u b y > と狭間は心底面白そうな顔をしているが、五つの風船で頭を模った背高の頭屋という屍だけは表情が窺えない。口元に手を持っていつて「ウッフ」と声を抑えきれない様子を見ると、忌逆や狭間と同じ反応を示そうとしているようだが。

それでも赤紗は、断定しない。顔だけを作っておいて腹の底で何を考えているのか分からないのは人間も同じだったし、まして目の前にいる七星は、己の性に理知まで兼ね備えた、質のみを見るならば屍の中で最高峰と言える群れだ。それを簡単に、表面だけを見て内面まで断定することなど、赤紗には出来なかった。

「面白そうだな。場所は？」

「山磨市近郊、すなわち」「八名津市、依海市、つてところか」

「……はい」

初手は良し、と赤紗が唾を飲もうとした瞬間に、狭間の右腕が赤紗の左腕を捻り上げた。

「その辺りというのはいいな、実にいい。依頼を受けるのはほとんど確定としておいてやる。だが……二、三質問させてもらおうか」

「ぐ……！！」最悪だ、と赤紗を齒軋りした。狭間の目を見上げる。そして確信する。確信してしまう。この目は、この顔は、信仰者のものではなく、審判者のものだ。疑念を晴らすために問おうとしているのではなく、ただ確認するためだけに質問という体を利用しているだけだと。

「心の準備などさせるつもりはないぞ、赤紗」左手の内側、動脈をぎちりと固定する。さらに、そこから伝って掌や首筋に蟲が這う。

これで心拍数・発汗・体温変化といった生理反射を通じて、赤紗の心の内が狭間に筒抜けとなる。「さて　じゃあまずは、一つ目といこうか。そうだなア……忌逆。適当な質問でいい。何かないか？」

狭間が振り返って四人を見渡した後、突っ立っていた屍に声を掛ける。首を横に振られると、次いで風船頭にも同じ言葉を繰り返した。しかし望む返答はなかった。気が向かないのか、はたまたそういう趣向が元よりないのかは分からないが、余計な質問が減ったということとは、赤紗の触れられたくない核心に触れられるまでの時間が減ったということだ。

あるいは北斗が帰還すれば拘束からは逃れられるのかもしれないが、そうなればそうなたで危険が情報でなく赤紗自身に迫ったというだけで、何の解決にもなりはしない。

「歪質、お前はどうか？」

少年の姿をした屍が、「じゃあ好きな食べ物」と投げ遣りに答える。彼もさして赤紗に興味があるようには見えなかったが、質問された時には答える性格のようだ。赤紗が助かった、と少し表情を緩める。

「随分腑抜けた顔だなあ、オイ。……だがこの方法は使えそうだな。分かりやすい、本当に分かりやすいぞ、赤紗。というわけで、早速使わせてもらおうとしようか」

狭間が眼前に迫る。顔の前で座り込むと、赤紗の耳元に囁く。

「お前とロギア以外にも人間が這入り込んでいるようだが、それらが全部で何人いるのか、それぞれどういう目的で大群ウチに与くみしているのか。それと、貴様の座壇のように特殊なスキルは持っているのか、持っているならばどういふスキルか。この四つだ。とつとと答える」

「……………その前に、歪質、さんの、「破碎音。赤紗の背中側、つまり固定されていた左腕から、骨の碎ける音がした。「いか、赤紗。大群ウチでの人間は屍を狩る側じゃあないんだよ。いくら元光言宗の背信僧といつてもな」

狭間が先刻の倍近い圧力で赤紗を脅す。きつと、腕に絡みついた蟲を通じて面白い程正確に赤紗の焦燥が伝わっていることだろう。もちろん赤紗にとつては何の面白味も有難味もない。

「人間達がいなくても、屍達は好き勝手に暴れ、星の満ちる時を待ち、『王』を顕現させ、死の国を建国した。お前達は潤滑油にすらなれていないんだ。ほんの少しの気紛れで、ちよつとしたすれ違いで塵のように掻き消える命だということを忘れるな。お前達は搾取される側なんだよ。牙を剥くつもりがあるかないかは知らんが、もつと上手く立ち回れよ、人間」

赤紗の左腕に激痛が走る。狭間からしか見えないが、強く捻り過ぎたために折れた骨が皮膚を突き破って露出していた。その骨を面白半分に赤紗の背中に突き刺す。

「たとえば今なら、俺の機嫌を損ねないように、必死になって媚びてみるとか、な」

引き抜いて、また別の箇所へ刺し込む。しかし腕と背中の方から走る激痛に歯を食い縛りながら、赤紗は知らないと言った。

その返答に、狭間の表情が固まった。驚いているようだ。骨がさらに深く刺し込まれる。赤紗が声を抑えても、狭間は面白そうな笑みを浮かべることはなかった。

「なんだ、死にたかつたのか、背信僧」

狭間が立ち上がり、百足の形をした腕を振り上げる。

「あばよ」

そう言つて振り下ろそうとした腕が、砕け散る。

『そつつかつかするなよ、屍』

扉から聞こえた声。

そこにいた六人の中で赤紗だけが、その声に絶望した。

「そんな……そんな馬鹿な!!! どうして貴男が此処に!!!」

『馬鹿とは失礼だなあ赤紗ちゃん』『中ボスが調子に乗つた脅しを

かけて』 仲間がその脅しに屈せず信念を選んで』 『今まさに命が絶たれようとしている場面だ』 『こんな状況を用意されちまったら、週刊少年ジャンプ愛読者である僕としては駆けつけざるを得ないぜ』 『そう』 『るろうに剣心の比古清十郎のようにね』

楔の『大嘘憑き』オルヴァイクシオン によつて赤紗の傷が痛みもなく回帰する。これで万全の状態の二人が揃った。

だが、あちらは狭間だけではない。歪質も重無も、忌逆も頭屋までが臨戦態勢に入っている。

七星の構成員五名に、対するは人類最弱と背信僧のたった二人。

「……逃げて下さい、楔さん。ここは僕が食い止めます」

跪きながらも、赤紗は自身の座壇、奇想蓮華キンウレンゲを構える。

「食い止める？ くくっ、面白いことを言っじゃないか、赤紗。ニシゲン逃げられるかどうか、試してみるか？」

蟲が狭間の身体から溢れ出す。この一匹一匹が屍で、狭間自身だと聞いている。聞いているという言い方では語弊があるが、つまり盗み聞いたのだ。こうなった彼から単独で逃げ切るのは、人間には不可能だろう。だが、屍を吸収して成長する赤紗の奇想蓮華でこれを防げば、一人が逃げ出す程度の時間は稼げる筈だ。

あとは赤紗の前で硬直している楔が駆け出しさえしてくれば、座壇を発動して壁を作ればいい。赤紗はそう計算して、楔を後ろへ下がらせようとした。

しかし、楔は動かない。

『変な算段立てるなよ、赤紗ちゃん』 『きみは腰抜かしてその場へへたり込んだまま、括弧つけるにも程があるぞコノヤロー！』 とも喚いてればいいんだからさ』

楔の手には、いつの間にか螺子が握られている。

『過負荷である僕はおそらく勝つのは難しいだろうけど』 『七星におまえらも勝ちを譲らないぜ』 『というわけだから赤紗ちゃん』 『この勝負、最後まで仲間を庇った』 『きみの勝ちだ！！！』

両手の螺子が狭間と頭屋の身体を捉える。飛び出そうとした歪質

と重無の足を床へ釘付けにし、「陣地」を展開した忌逆の脳天に、五本目の螺子が突き刺さった。

五つの螺子を放った直後、楔が唐突に天頂方向を指差す。赤紗が見上げようとして、その頭蓋を最後の螺子が貫いた。

『シックススクリュー第六の螺子、「星火花」』 『とでも言っておこうかな。』

赤紗が痛みの残る後頭部を押さえながら立ち上がると、七星の五人は既に立ち去っていた。立ち去った、とは言っても彼らの帰る場所はこの筈だが、どこへ行ったのかと赤紗が周囲を見渡す。

と、自分の背後に佇んでいる悍ましい感覚に気付いた。

振り向く。彼の予想した通り、球磨川楔が壁にもたれて立っていた。ポケットに手をつ込んで格好を付けていて、一瞬だけ奇想蓮華を使ってしまったらしいそうになる。

『よう』 『お目覚めかい？』 『赤紗ちゃん』

血迷うな、と自分に言い聞かせているところへ、楔が口を開いた。自分より遥かに劣る人間が格好を付けていることがここまで心を乱すものだとは思っていなかった。赤紗にも、楔は友人のように接する。リオンと違い、赤紗は別に楔の過負荷を一身に受けたわけでもなく、ただ単に嫌悪感を得るだけだった。

あるいは、好感を失ったのか。

『王様からの招集かかっているから呼びに来ただけだ』 『急がなくていい？』

その言葉に、心の中で延々思考していた赤紗の全身が硬直する。しかし、彼がすぐに状況を理解して駆け出しても、楔はすれ違った後も赤紗を見つめたまま動かなかった。

「急がないと、貴男も呼ばれているでしょう！」

赤紗が自分の仲間である楔に声をかける。

それを楔は満足そうな顔で見送った。どこに隠れていたのか、二人の少年少女が楔の後ろに現れる。どうやら赤紗がこの場を離れる

のを待つていたようだ。

誰一人として、球磨川楔という人間がここにいて、という現実には違和感を覚えることはできなかったことについて、楔は本当に、心底安堵していた。

「……」 「無事に溶け込めたみたいだね」 「さ、僕達も追おうか」 「一応、一構成員（新入り）として振舞わなきゃならないんだからさ」 そう言つて、楔は歩き出す。

二人の過負荷にんげんが楔の後に続いた。

大群中枢部、『王』の陣上。

そこには、『王』の他、五体の屍と四人の人間が立ち並んでいた。

「これで全員か？」

みなちをゆいはいちろうためとも

源鎮西八郎為朝という長つたらしい名を持つ現存最古の屍が、目一杯の威圧と共に赤紗に言葉をぶつける。

「……はい。これで全てです。間違いありません」

噴き出す汗を拭いながら、赤紗が答える。隣でへらへらしている楔を睨みつけるが、楔は取り繕おうともしない。

「じゃー過負荷代表として僕から自己紹介させてもらおうかな」 「球磨川楔です」 「好みのタイプは裸エプロンが似合う女の子です！」

振るいかけた為朝の腕が「善い」という『王』の言葉で止まる。

それを待つて、残りの二人も自己紹介を始めた。

ちよつがさき

「蝶ヶ崎蛾々丸。今までの人生で一番不味かったのは変態教師の靴の味です」

えむかあかえ

「江迎怒江つていいいます。今までの人生で一番美味しかったのは……ええと、飢えを凌ぐために自ら食べた新聞紙の味ですかねえ」

執事服を着た背の高い少年と、白基調ベースのセーラー服とフリルの印象的なロングスカートを着た少女が順に挨拶を終える。それぞれ、



左目につけた片眼鏡モノクルと両手に握った包丁とがトレードマークといったところだろうか。

最後に自己紹介した少女の方は、頭と腰の後ろにそれぞれ動脈と静脈の血を混ぜたような色のリボンをしていた。綺麗な言い方をするのなら、薔薇色、だろうか。過負荷かのじよに訊けば、何の迷いもなく前者かそれに似た表現で答えるのかもしれない。楔や蛾々丸とは質の違う禍々しさが、彼女からも滲み出していた。

銘々が思うままの自己紹介を終え、『王』が立ち上がる。

顕現の儀を終えた際には全身素っ裸だったのだが、今はちゃんと平安貴族のような出で立ちだ。為朝がデザインしたらしい。

「うむ。球磨川楔に蝶ヶ崎蛾々丸、それと江迎怒江か。善い名だ。お前達が余よの下に集うことを許そう」

都城王土を凌駕する存在感と共に立ち上がった『王』は、言いたいことだけを言い終えるとさっさと座ってしまった。

無論、それを許す楔ではない。

『おいおい王様』『ちよつと礼儀がなつてないんじゃない?』『確かに僕達はきみの名前くらい赤紗ちゃんに教わったけどさあ』

『もうちよつぐえつ?!』

楔の喉元を為朝の指先から伸びた赤い糸条いとじこが貫く。囿としての役目を果たした楔の背後から、怒江と蛾々丸が『王』の眼前に飛び出した。

「あーっと、また失敗しちゃいましたあ……本当に残念で恥ずかしいです」

「全く二人共、気持ちは分かりますが 同感です。」

怒江の掌打と蛾々丸の回し蹴りを受け止めて、『王』は不敵に笑う。

「確かに余は自己紹介をしていなかったな。……だがお前達も頭が

高いぞ。”弾け”」

玉音。

呪いでもなく、術法でもなく、神として万象を支配する為の力。

その一撃で、過負荷マイナスの面々が陣の端まで吹き飛ばされる。

「ダメージでなければそのまま自分が受けてしまふようだな、蛾々丸よ」

『王』が蛾々丸個人へと言葉を掛ける。もつとも、その計り知れなプレッシャーい威圧は全て、彼の『不慮の事故』エンカウンターという過負荷スキルによって、為朝へと押しつけられたわけだが。

「善い、許す。為朝ならば耐え切るだろうからな。それよりも、お前達に自己紹介をしておこう」

”聞け”と。

玉音によつて命じ、巻き込まれた赤紗と教主を含めた九人全員が、『王』を見る。

「余は魔王 死の国の『王』。崇神魔縁スガミマエンである」

『王』の名乗りに呼応して、大気が凍えるように震動した。

## 5 蟲 vs 虫

遠くで銃声が響く。

「えへへ！ 始まったみたいだよ、王土」

行橋未造が背中の中の荷物を背負い直す。

夜。依海高校の校舎の一つでは、特殊なスキルを用いて死体に死霊を定着させたヒトガタと呼ばれる擬似屍の群れと、屍姫星村眞姫ほしむらまきの戦闘が始まっていた。王土と行橋は現在、その様子を別の校舎の屋上から眺めている。ヒトガタが窓から這い出、屋上へ上る。そこに待機していたヒトガタからワイヤーを受け取り、下を覗き込んだ。追ってくる眞姫那の首を落とすつもりらしい。

「ふん 面白くないな」

突然腕が止まり、眞姫那の首が切れずに残る。ワイヤーを手渡したヒトガタも不審そうな顔をして近付くが、その動きもまた止まってしまう、次の瞬間には眞姫那の首へとワイヤーを絡めていたヒトガタの頭が、MAC11イングラムの弾丸に貫かれた。待ち伏せのヒトガタが慌てて覗き込んだ時には、既に眞姫那は教室内へと下がっていた。

「王土」

行橋が王土の行動を咎める。今夜この学校で『実戦』があると教えてくれた、ここ一帯の守護をしている男から「余計な手出しは極力避けてほしい」と言われていたのだ。

依海市・八名津市地区守護『弦拍』げんぱく少僧正、送儀そうぎ嵩たか証まさ。

守護というのは、対屍戦用の上級僧兵のことで、契約僧と監査官長という役職の人間を1〜5名程度率い、それぞれが己の配置された都道府県を日夜屍から守っている。さらに嵩証は、『弦拍』の銘を持つ光言宗最精鋭の武闘派僧侶だった。しかしそんな人間の中で最高峰とも言える肩書きを持つ相手にも、王土の尊大な体制たいどは崩れない。

「人間が怖くて人外と戦えるものか。君主おれは暴政を敷くことこそあ

れ税率零の理想塗れの国家を樹立する気などさらさらでないぞ」

言っている内に、屍姫と分断された契約僧　　花神旺里かがみおうりという名の少年が和服の男と邂逅している。

何やら話しているようだが、行橋アブノーマルの異常な受信感度で感知することとは出来ても、王土には何を言っているのかさっぱり聞こえなかった。

「和服の奴は観覧希望って言ってるみたいだね。ボクらと同じだ。でも眞姫那って女の子に断末魔の悲鳴をあげさせてやるとか……チューニングをミスったかな？　ちよつと聞こえにくいや、って王土？」

屋上から校舎内へ繋がる階段を勝手に降り始めていた王土を追いかける。しかし身長差があり過ぎるためか、王土の早足と行橋の走りではほとんど距離が縮まらない。

「ちよつと王土！　置いてかないでよ！　あ、オーリって男の子が逃げ出したみたいだよ、って王土！　そろそろギブ！」荷物と厚着との重み、さらに仮面をしているために息がしづらいのか、行橋がすぐに音を上げる。しかし王土はそんな相棒を気遣おうともせず、狭間の居た教室へ急いでいた。

「行橋、悪いが俺は先に行く。あの和服を除けば身体能力はおそらく人間とそう変わらんだろっ、お前でも充分対処出来る筈だ。ではな」

王土の足がさらに速くなる。疲れ果てた行橋が反応する頃には、王土の姿は見えなくなっていた。

「…………マジ？」  
窓を叩き割って現れたヒトガタ達に対し、取り残されてへたり込んだ行橋は、そう独り言こごちた。

「ヒザマ家  
跪け。」

背後から声が聞こえると同時に、狭間の身体が服従の姿勢をとる。  
「……………誰だ？」

背後から迫る異様な気配、威容の圧力に、狭間が顔だけで振り向いた。金髪の少年は笑ったまま、息一つ乱さずに歩み寄ってくる。

「偉大なる俺の名は都城王土。験体名は『創帝』<sup>クリエイト</sup>というのだが、まあ見知りおく必要はないぞ。貴様はここで立ち上がって戦って負けて殺されて死ぬのだからな。自分を殺す奴の名くらい覚えておきたいというのであれば、俺が直々に脳に刷り込んでやっても構わんが」  
狭間が立ち上がると、王土が満足気に立ち止まる。

「聞いたことのない名だな。まあいい、どうせ観覧する必要も無くなってきた頃だ。少し、俺の暇潰しに付き合ってもらおうか」

数多の羽音が王土を取り囲む。それに対して、余裕の表情のまま  
で、王土は言葉を口にした。

「平伏せ。」

その言葉に、狭間の身体が再び沈む。しかし、しかし、無数の蟲は平伏さない。

「……………悪いな、最初の一撃で、貴様の攻撃は理解していたよ」

羽音に続いて、地面を這いずる音。それらは全て、王土の言葉に屈することなく、王土へと近付いていく。

「ば……………馬鹿な！俺の支配は完璧だった筈だろうが！貴様の身体を支配し、貴様が支配する蟲を支配した筈だ！だのに何故、何故貴様の蟲は蠢ける！」

支配力を失った暴君は、既に余裕を失っていた。狭間の笑みは消えていない。

「簡単なことさ。俺は『蟲の身体の屍』じゃあなく、『屍の蟲の群れ』なんだよ……………お前の使った電気操作による支配じゃ、『男』の身体は操れても、『狭間』<sup>俺等</sup>の身体まで支配することはできない」

蟲が包囲を終える。正面も背後も頭上も足元も、夜より暗く空より黒い蟲に覆われている。

「や、やめ……………っ！？う、あつ」

汗が滴り落ちる。それを合図に、蟲達が沸き立つ。

「止める！ く、来るな！ 潰れる！ ……爆ぜる！ し………従え  
屈せよ属せ跪け！！ 降れ靡け服せ平伏せ！！ ひ、い………ひいい  
いいいいいつ！？」

言葉が追いつかない。形容できない恐怖が王土を襲う。

王土は強く瞼を閉じた。深く、暗い闇が周囲を呑み込むのが分かる。

自分を王と誦してくれた付き人はおらず、己を王と証していた異常は通用せず。自らを王と称した男は、如何な走馬灯を浮かべたのか。

ごく普通の親に育てられた六歳までの記憶。支配力を支配する為の研鑽を重ねた六歳から十二歳までの記憶。そんな七年間が無に帰した十二歳から十五歳までの記憶。新たな暴君を創造し直して再出発を果たした十五歳から今までの記憶。

その何時を回顧したのかは分からないが、その走馬灯は体感時間においても一秒に満たない間に、実時間にして十分の一秒にも届かない間に途切れた。

「如何かな？ 『死番虫』 第二番、『死限爆弾』の味は！」

王土が目を開き、見開く。闇のような蟲が晴れて広くなった王土の視界に、見慣れない背中が映る。

地は洋、形は和を旨としたような服装。その右腕には、気絶しているのかピクリともしない行橋が抱えられていた。

「お前は 何故だ、何故お前が此処に居る！？」

蟲という蟲が片端から消え去っていて、驚愕する王土と笑みを浮かべる狭間の間には、一人の男が立っていた。

「そう冷たくあしらってくれるなよ！ 私は仲間のピンチを見過ごせないんだ！」

行橋を王土へ向けて放り投げる。一瞬の隙を突こうと再び展開した蟲が、次から次へと爆ぜていく。

「………そこで怯えている男と違って、お前は骨がありそうだな。…

……というよりお前、いつそのこと異常を裏切つて異形に付けよ。  
お前のそれは俺等に近い。屍なら、お前のことをもつとよく分かつてやれる。人間じゃ分からない真の髄まで分かつてやれるぞ」

狭間が口端を吊り上げると、狂ったような笑みがいびつに歪んだ。「生憎私は仲間を見捨てるのは嫌いでね！ というわけで、仲間を助ける私の義のために、一戦交えてもらおうか。『サーティン・パーティ』収録、『裏の六人』より糸島軍規がお相手仕る！！」

狭間はやはり表情を変えない。「ま、すぐに泣きつきたくなくなるさと零しただけだった。

両者の間の沈黙は、後ろで眺めているだけの王土の肌が張り詰める程に鋭く。王土は目の前の男を、他者の理解など得られず、己の理解すら手にできなかつた男を、狭間の同類項として心の底では認識していた。人間よりも屍に近い存在として。

それでも。

狭間の面白半分な仲間意識と王土の肥えた鑑識眼が如何に正鵠を射ていても、糸島軍規という一精神は王土と行橋を守るため、自らの同類項を滅するという選択を迷わなかつた。

だからきつと、彼は屍よりも屍姫に近いのだろう。自分の力を自分の決めた理由で、自分の決めた敵へ向ける。そんな彼が、理解できないからといって己の異常を方向付けることを疎かにする筈がなかつた。

分からないなら分からないなりにと抽出し、研究し、精錬した軍規の異常は、狭間の蟲を現れた端から、時間にして十数秒で爆散させる。

だが、蟲が十数秒で爆ぜてしまうならばその十数秒で攻撃を加えればいいだけの話だ。

「死んで屍となれ、ヒーロー気取り！」  
唳つ、と。

擁する蟲の大部分を瞬間に注ぎ込み、軍規までの一直線を覆い尽くし軍規の心臓を食い潰す筈だった狭間の攻撃は、それでも『死限

爆弾』の餌食となった。

「馬鹿な……！？ そんな筈は、」

正解を見つけ、勝ち誇り、前のめりになっていた狭間の表情が歪む。おかしい、こんな筈じゃない、という思考に囚われる内に、背後からの攻撃を受けた。 否。

頭の真後ろの空間が爆発した。

「……この、人間風情がッ！！」

頭に浮き出た血管から液体が漏れる。だが、軍規の視線を追って爆撃を回避している間に、狭間は再び笑みを浮かべた。

……く、は。勝ちを急ぎすぎたな。今で解けたぞ。今度こそ退場してもらおうとしようかね」

狭間の辿り着いた結論。それは、軍規の能力が『肉体を指定した爆撃』ではなく、『空間を指定した爆撃』であるというものだ。

蟲を爆発させていたのではなく、蟲の群れの中心で、複数の爆発を起こしていたのだらう。それも蟲の量に合わせて、爆発の大小を調整しながら。

当然、蟲を指定した後は放っておけばいい前者の攻撃方法とは違い、狭間の思考を読んで蟲の動きに合わせて爆撃を設定しなければならぬ。普通の演算能力で処理し切ることができないだらう。だが、目の前に立つ男がそれを行うことに特化した人間であるならば話は別だ。

それこそが、<sup>アブノーマル</sup>異常という存在なのだから。

サヴァンみたいなものか、と一人合点して、狭間が再び軍規へ意識を向ける。

考え無しの熱血漢に見えて、案外伶俐に行動している。作戦において己の性を掲げていないとはいえ、全く自分の上を行かれたのは、すっかり自分の裏をかかれたのは、何戦ぶりだらうか。

狭間が笑う。

対する軍規は、露骨に悩むような仕草を見せている。

「今のを耐えたのか！ 見かけに拠らず存外タフじゃないか！ な



るほどなるほど、そうであるならばこれをこうして おっと！」

蟲を爆破する間にも、軍規の顔は問題を読み終えて解答用紙を眺めているような表情で固定されるようになった。狭間の警戒心が鎌首をもたげ、死線の争いは一瞬の硬直を見せる。

狭間が七星の頭目という名を背負っているのと同じように、彼は彼で『裏の六人』のリーダー格を務める男だ。そんなことは狭間の知識にはないのだろうが、頭が切れるという情報はくっきりとインプリントされていることだろう。

均衡の揺れが勢いを増す。

軍規の袖を蟲が啄んだかと思えば、爆風に巻き込まれた狭間が屋上のフェンスに肩を擦る。そして、再び狭間へと天秤が揺らごうとしたその時。

「いいな！ こいつはいい！」

軍規の顔が晴れ渡った。どうやら何か思いついたらしい。

「やつと貴様を斃す手段が見えたぞ、屍！ 新作のお披露目だ

『死番虫』 第十一番 『タイミングパスセイジ河流れ』！！」

びたり、と狭間の攻撃が止む。

既に両者の威容は常人の耐えられるそれではなくなっていたが、お互いがさらに高みへと向かう。

軍規は依然として勝ち誇った顔のまま、狭間は神経質に周囲を見渡している。表情を見る限り技の組成を失敗したというわけではなさそうだが、『死限爆弾』よりもずっと長い溜めタイムラグがあるようだ。

「来ないのか？ なら、こちらから行くぞ！」

『死限爆弾』によって狭間の蟲が蹴散らされる。狭間が特攻を決意し、軍規の『河流れ』がようやく火を吹こうとした瞬間、

「止まれ！！！」

声が響いた。

電磁波を介さない、純粹な叫び声だった。

軍規は特に後ろ髪を引かれる様子もなく、狭間は嘖き出した冷や汗を拭いながら距離を取る。あのまま続けていれば、この場は軍規

に軍配が上がっただろう。しかし助けるべき仲間の制止とあれば、軍規にこれ以上戦う理由はなかった。無論、続けていたとしても、狭間もただで痛手を負うつもりなど毛頭なかったが。

二人の戦闘が止まると、辺りが一気に静寂に包まれる。

物音一つしない。

銃弾の音すら、しなかった。

「俺が言うのも何だがな……糸島。屍姫と契約僧は無事に勝利したようだぞ。そして、元々俺達の仕事は観覧なんだよ」

王は王らしく悠々と屋上から眺めているつもりだったが、少しばかり高貴なる好奇心を刺激されてしまつてな、と言葉だけの弁解を並べたが、誰もそれに耳を貸している様子はない。

「糸島よ、ここは退こう」

王土と行橋がこの場を離れることを告げると、眞姫那とオーリの勝利を告げた時とは違い、軍規は素早く何の未練も無さそうにそれに従う姿勢を見せる。

狭間がフェンスにもたれかかる。

「俺も俺の仕事を済ませたいところだ。とっと引き込めなかったのは惜しいが、一応これでも組織の一員なんでね」狭間としても今日の大目的を優先させたいようだ。

これで、両者の意向は一致した。

「守るべき仲間もない状況では私が戦う理由もない！ ではな！ 屍！ 今度会った時はこの国に住む人々を守るため、正々堂々真つ向から力を尽くして策を尽くして死なせてやる！！」

暑苦しく喋りながらも、行橋を抱えた王土に倣って軍規が背を向ける。そこを狙って放った百足状の腕は、やはり、爆発した。

飛び散った欠片が頬を裂く。狭間は僅かに漏れた血を舐めとりながら、

「糸島……軍規……」

と憎々しげに呟いた。

誰もいなくなつた空間をひとしきり睨んだ後、消え損なつた死霊

達をこの土地へ染み渡らせる為に、校舎から飛び降りた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7456z/>

---

死なない少年と死んだ国

2012年1月11日01時54分発行